

源氏物語「花ちる里」の一本について

田中 重太郎

一
架蔵源氏物語「花ちる里」の一本について簡単に紹介しておきたい。

源氏物語の現存古写本については、源氏物語大成ならびに源氏物語事典下巻所収の諸本解題（大津有一博士執筆）にくはしいが、後者にあげられてゐる主要伝本約百三十のうち、鎌倉時代書写あるいはそれ以前と考へられるものは約六十本であるが、ここに紹介するものは、それらに説かれてゐるものではなく、その書写年時もまづ室町時代中期乃至は末期とみるべきものであらう。したがって、その古さにおいて、決して珍重すべきものではないが、学界未紹介の書であり、その本文系統において注目すべきところが見え、また本文語句の表記ならびに朱点・朱注にも見るべきところがあるので、ここに紹介しておくと思つたのである。

原本は、縦二一・六センチメートル、横一三・八センチメートルの胡蝶装、紺の紙表紙の中央上部に濃い朱の題簽（縦一〇・七センチメ

源氏物語「花ちる里」の一本について

ートル、横二・六センチメートル）が貼つてあり、墨附七枚、各丁七行、一行の字詰は、十九字から二十三字におよんでゐる。和歌は、すべて二字下げにはじまり、終りは、本文につづいてゐる。蠹損がはなはだしいので、最近裏打ちをさせたところ袋綴のやうになり、写しの年代が新しく見えるが、すくなくとも、室町末期は下らない古写本と思はれる。ただし、奥書もなく、筆者も未詳といふべきである。本文には、ところどころ朱点、朱注を加へてあるが、それは、後掲活字翻印本文の下に注しておいた。

さて、この本文は、後に全文を活字にうつしたから、源氏物語大成校異篇にあたっていただけば、すぐわかるが、青表紙系統の本では決してないといへよう。はじめの方の異同をひろつてみて、

青表紙本（大成本底本〔定家自筆本〕） 架蔵本

いつとなきことなめれ
めれ
いつれとなき事な
（大成 三八七頁 1）

おほしなるるゝに
思めぐらし給に
（同 3）

御心に
御心はへに
（同 5）

三のきみ はかなう。	三の君も。 はかなく。	三のきみ はかなう。	三の君も。 はかなく。	(同)	6
なこりの。	なこり	なこりの。	なこり	(同)	6
わすれもはてたまはず。	わすれもはて給はぬに。	わすれもはて給はぬに。	わすれもはて給はぬに。	(同)	7
人の御心をのみつくしはて	人のみ心のみつきはて	人の御心をのみつくしはて	人のみ心のみつきはて	(同)	7
たまふには。	給にも。	たまふには。	給にも。	(同)	9
御よそひなく。	御よそひならず。	御よそひなく。	御よそひならず。	(同)	10
御せんなどもなくしのひてなかくはのほと	御せんなどもことになくしのひ給へり中川のほとさうのことの	御せんなどもなくしのひてなかくはのほと	御せんなどもことになくしのひ給へり中川のほとさうのことの	(同)	11
ことを	やとりなりと思いて給に	ことを	やとりなりと思いて給に	(同)	12
やとりなりとみたまふ	やとりなりと思いて給に	やとりなりとみたまふ	やとりなりと思いて給に	(同)	三八八頁
ほとへにける	ほとへにけるを	ほとへにける	ほとへにけるを	(同)	2
御くるまをしかへさせ	御くるまおしかへさせ給て	御くるまをしかへさせ	御くるまおしかへさせ給て	(同)	3
これみつ	これみつを	これみつ	これみつを	(同)	4
ことふこゑは……こ	かたらふこゑは……ことさらに	ことふこゑは……こ	かたらふこゑは……ことさらに	(同)	9
とさち	……ことさらに	とさち	……ことさらに	(同)	9

考へることにより、まづ架蔵本が青表紙本系統本でないことは明らかである。

つぎに、河内本としてみては、いかがであらうか。

大成 校異篇のこの巻における河内本系統本は、七毫源氏本（伝頼阿筆）・高松宮家本（隆旬筆）・尾州家本（伝為家筆）・平瀬本（伝為家筆）・大島本・鳳来寺本の六本が校合せられてゐるのであるが、これら六本のこの部分の共通本文、つまり河内本系統本文と考へられる本文をみると、

(1) なれと	(大成 三八七頁)
(2) わつらはしくなと	(同)
(3) 思ひめくらし給に	(同)
(4) みこ	(同)
(5) おはします	(同)
(6) かくれたまてのちはいともの	(同)
(7) ありさま	(同)
(8) 大将の御心はへ	(同)
(9) 三の君も	(同)
(10) 名残	(同)
(11) さすかにナシ	(同)
(12) わさととはた	(同)
(13) 御心のみそ	(同)
(14) おもほしう給事も	(同)
(15) 御よそひならず	(同)

などとあつて、青表紙系統本文とは、まったく異なつてゐる。右のうち、「なこりの」「ことふこゑ」が「なこり」「かたらふ」になつてゐる本が青表紙系統の校合本中に一二あるが、他のところの多くの異同を

- (16) ことになく (同) 11)
- (17) 忍給へり (同) 11)
- (18) などナシ (同) 12)
- (19) さうの琴にあつまを…… (同) 12)
- (20) やとりなりけりとおもひ出給に (三八八頁) 1)
- (21) 程へにけるを (同) 2)
- (22) なきわたるは (同) 3)
- (23) もよほしきこえかほなるに (同) 3)
- (24) をさへさせ給て (同) 3)
- (25) かきねを (同) 5)

などであり、これらを架蔵本と校合するに、架蔵本は、この二十五箇所のうち、(8)(9)(10)(17)(21)の六箇所の本文が一致してゐるだけで、他の十九箇所は、決して河内本文ではなく、一部分河内本系統本文に似てゐてもかならずしもさうではないと考へられるのである。

それでは、架蔵本の本文系統は、いはゆる別本と称すべきものに属するのであらうか。

源氏物語大成の校異篇花ちるさとの別本には、御物本（東山御文庫本）と陽明文庫本（伝甘露寺資経筆）との二本しか校合してない。いふまでもなく、花ちる里の巻は、関屋とともに源氏物語中もっとも分量の少い巻であり、いはゆる断簡零冊といはれるものも比較的少いやうである。現にさきに示した源氏物語事典下巻所収の諸本解題に解説せられた約百三十本中にも五十四帖そつてゐるものは別として、一帖乃至数帖の古写本に花ちる里は前田家蔵の定家卿筆本と天理図書

館蔵の六冊（篝火・野分〔この二冊は、河内本〕、花散里・薄雲・行幸・夢浮橋〔この四冊、青表紙本〕）本と、おなじく天理図書館蔵の伝明融筆本九帖に花散里があるくらゐであるが、これらは、すべて青表紙本か河内本かにわりきられてゐるのである。しかし、定家が家の本とした一証本の青表紙本は、彼の自筆の本が花散里・柏木・早蕨―花散里・柏木の二帖は、前田家蔵、早蕨は、保坂家蔵―の三帖現存してゐることは、周知のとほりであり、天理図書館所蔵本に青表紙系統の野分の巻がある。すなはち、青表紙系統本として、もつとも高度のものがこの巻の本文には現存してゐるわけである。しかし、いふまでもなく源氏物語は紫式部の作であり、すくなくとも、藤原定家の時代から二百年近く前に成立した作品である。したがって、定家の本と本文が異なつてゐても、その本が源氏物語の本文として悪い本だといへないことは申すまでもあるまい。

そもそも池田博士のいはゆる「別本」といふ系統本はどこまでも便宜的な呼称であり、源氏物語の異本名としてはもともとなかったのであつて、これは青表紙本でも河内本でもない本文があれば、これをかりにかう呼ばれたのである。そのことは、池田博士の「校異源氏物語」の凡例に説かれたとほりであり、この本文の系統に多数共通のものは少い。ここに収められてゐる御物本と陽明文庫本とに共通のところをはじめの方だけ示すと、

- (1) かくナシ (大成 三八七頁) 1)
- (2) おほしめくらさるゝに (同) 3)

(3)	いと	(同)	4)
(4)	あはれけなる	(同)	4)
(5)	なこり	(同)	6)
(6)	給に	(同)	9)
(7)	ひとよ	(三三八頁)	1)
(8)	程へにけるを	(同)	2)
(9)	郭公のなきてわたるも	(同)	3)
(10)	をしかへさせ給て	(同)	3)
(11)	つまと	(同)	6)
(12)	けわひともして	(同)	7)
(13)	ことさらに	(同)	9)

などであるが、この十三箇所をかりに別本系統本文とみるとしても、そのうち(5)(10)(13)の三箇所が架蔵本文に一致してゐるが、他はさうでない。

かくて、架蔵本花ちる里は、大成の校異篇によるかぎり、青表紙本でなく、河内本でなく、またいはゆる別本と称せられる本文でもなさうである。

ただし、いはゆる「別本」の性格についてはなほ考へるべきであらう。前述したやうに、青表紙本系統本でなく、河内本系統本でもないものをすべて「別本」と呼ぶならば、架蔵本も、その一つであるといはねばなるまい。「別本」の命名者である池田博士は、源氏物語大成巻七 研究資料篇 において、「別本の呼称とその性格」を説き、その第一節に 別本の種類 として、左のやうに解説せられてゐる。

「別本」の呼称による古写本には大体左の種類が認められる。

一、河内本成立以前の古伝本である場合。

二、河内本成立以後の混成本文を有する伝本である場合。

三、註釈的意図によつて取扱はれた本文である場合。

四、絵詞・古註釈・古系図等に摘要引抄されて残存する本文である場合。

更に第二の場合を細別して、

イ、青表紙本と河内本との混成

ロ、青表紙本と古伝本との混成

ハ、河内本と古伝本との混成

の場合が認められる。(同 一七二―一七三頁)

架蔵本が、右の三・四に該当するものでないことは、明らかであり、一であるか二にあたるものかを考へるべきであることも後掲本文およびいままで述べた諸本校合異同調査で判明しよう。

池田龜鑑博士は、右の論において、「一 河内本成立以前の古伝本である場合」については、「これは鎌倉時代初期までに写されたといふ確証のない場合、判定困難であるが、書写年代が比較的古いものの中にはこの種のものがある」とし、伝西行筆竹河の巻断簡あるいは同一帖やおなじく東屋の巻残缺、伝源三位頼政筆柏木の巻一帖、伝二条院讚岐筆少女の巻一帖などは、「青表紙本でもなく、河内本でもなく、またそれらの混成でもない」と考へられる」といはれ、「河内本の成立に参与した諸本は当然別本として扱はれるべきものであるが、それらの本は殆ど現存しない」と説かれた。架蔵「花ちる里」は、鎌倉時代

の写しとは考へられず、書誌学上、文字・紙などからみて客観的にさうとは認めがたいから、右にいはれる「判定困難」の部に属するであらう。

つぎに、池田博士は、二の場合、すなはち、「青表紙本と河内本、またはそのいづれか一方と古伝本がそれぞれ接触して混成本文を生ずる場合」について、多数の本文を参考して得た校訂本である河内本は、それ自身別本的な性格をもつてゐるが、この河内本を一つの伝統と認めて、なほその以後において青表紙本その他との接触があり得るとし、かうした混成または、混成を導く原因として、つぎの二つをあげられた。

その一つは胡蝶装の一折乃至数折が缺脱して、機械的にその部分を他系統の本で補つた場合である。例へば伝寂蓮筆三条西家旧蔵の若紫の巻、伝為家筆橋本進吉博士蔵若紫の巻のごときは、前の方が河内本で、後の方が青表紙本に近い本文を有する。従つて、一種の混成と考へられ、別本の呼称を与へざるを得ない。他の一つは、本文を相互に校合して、その一方を選択し、これを一筆で書写する場合である。中世の写本にはこの種のものがかかなり多い。例へば、青表紙本の一本である菅の三条西家本において、明石の巻に「月入れたるまきの戸口けしきことにおしあけたり」と、河内本の本文を混入してゐる。また正嘉の奥書ある古写本において、宇治十帖の或巻には、青表紙本に対して河内本らしい本文の対校があり、所々校合を落してゐる。もし校合本文を任意選択しつゝ一筆で浄書するならば、所謂別本が生ぜざるを得なくな

る。源氏物語ではないが、その好例は兼好自撰家集にみられるみせちの部分である。この部分を任意選択するならば、ここに当然各種の異文が生ずる。これらは別本として取扱はれてきたものである。

(一七三〜一七四頁)

しかしして、右の二つを架蔵本文についてみると、その一つの綴ち補ひの混成本でないことはまづ明らかであらう。他の一つの「本文を相互に校合して、その一方を選択し、これを一筆で書写する場合」があるならば、架蔵本はこれに該当するといへるであらう。しかし、これの例にあげられた三条西家本、正嘉の年代の奥書がある古写本の場合などと、架蔵本の本文とをあはせ考へるとき、一概に、架蔵本をもってこれにあたるのもいひ難い。その例がもっと豊富にあげられ、証明せられてゐないかぎり、「中世の写本にはこの種のものがかかなり多い」にしても、架蔵本をこの場合の産物と断定できないのである。といつて、もちろんこれを河内本成立以前の古伝本であるともただちに断定できないであらう。架蔵本は、すくなくとも、青表紙本・河内本両系統の単なる混成本文でないことだけはたしかであり、近世以後注釈家の手を経たものでないこともまちがひないことである。そして、その系統は、やはり便宜上、別本の名をもって呼ぶべきであらう。

二

ここで、参考のために花ちる里の巻のはじめの方を、架蔵本を中心に、青表紙本(定家自筆本。源氏物語大成 主底本)と河内本(尾州

家本)とを対校してみると、つぎのやうになる。中央は、架蔵本、右は青表紙本、左は河内本のそれぞれ本文である。異同は、漢字とかなとの相違まで示した。ここで対校したのは、花ちる里全巻の三分の一足らずであるが、これだけの部分においても、架蔵本の独自異文、青表紙本と一致する箇所、河内本と一致する箇所などがよくわかるであらう。

ひとしれぬ御心こゝろつからの物おもしさはいつれとなき

事なめれとかくおほかたの世につけてさへわつらはしう

おほしみたる事のみまされは物心ほそくよ

の中なへていとほしう思めくらし給にさすかな

事おほかりれいけいてんときこえしは宮たちもおは

せす院かくれさせ給てのちいよ物あはれな

る御ありさまをたこの大將殿の御心はへにもてかくされ

てすくし給いたまふなるへし御おとうとの三の君もうちわた

りにてはかなくほのめき給しなこりの御心

なれはさすかにわすれもはて給すわきともてなした

まはぬに人のみ心のみつきはて給へるめる

をもこのころの事なくおほしみたる世のあはれの

くさはひには思いて給にもしのひかたくて五月

雨の空めつらしく晴たる雲まにわたり給な

はかりの御よそひならすうちやつして御せんなどもこと

なくしのひ給へり中川のほとおはしするにさや

かなる家の木たちなとよしはめるによくさうのこと

のあつまをしらへてかきあはせにきはしくひきな

らすなりかたちかなるへしおほむ御みとまりてかたちかな

る所なれはすこしさいいて、見いれ給・へはおほきなるか
・・・・・

つらの木のをひかせにまつりのころおほしいてられてそこ
お風・

はかとなくけはひおかしきをたゝひとめ見給・しやとり
たまひ

なり・と思・いて給・にたゝならすほとへにけるを
けりおもひたまふ

おほめかしくやとつゝましけれとすまかてにやすらひ
う給・たま

ふおりしもほとゝきすなきてわたる・もよほしきこえかほ
は

なれは御くるまおしかへさせ給・てれいのこれみつをい
るにを・さたまひ

給・
れたまふ

三

つぎに、この零本に加へられてゐる朱点・朱注について一筆しるし
たい。

この書に朱を点じた箇所については、後掲活字翻刻の下に注してお
いたがおよそ七十箇所あるが、その句点を朱で打ったところはしほら
くおくとして、「さゝやかなる家」の「さゝやかなる」を「さゞやか

源氏物語「花ちる里」の一本について

なる」と濁り、「かどぢかなる」「おぼめかしく」「しんでん」「ごせ
ち」「うちすんじ給」などの濁点は、それがすべてにわたつてゐるも
のでないだけに興深く参考になるであらう。また、「いかにとりてか」
(五才)の朱注、「イニシエノ事カタラエハ時鳥イカニシリテカフル
コエニナク」の「フルコエニナク」は源氏釈と紫明抄との注するところ
であり、他の古注・旧注は「古声にする」「なく声のする」などと
ある点からも、この朱書の古きを知ることができよう。奥人には「な
くこゑもする」とある。

さらに、この本の本文でまことにありがたいことは、「御……」を
「み……」「おほん……」などと区別してかな書きで表記してゐるとこ
ろが比較的多いといふことである。

源氏物語 きりつばの巻頭の「いづれの御時にか……」の「御時」
は、一般に「おほんとき」と読まれてゐるが、古来信すべき古写本の
類に「おほんとき」乃至「おほん時」と表記せられてゐるものが一本
もないことは、周知のとほりである。大成の校異篇きりつばの巻所収
の底本・校合本十四本にもすべて「御時」「御とき」とあるらしく、
「おほん——」の表記がない。宮嶋弘氏が「いづれのみとときにか……」
と読むべしとせられたゆゑである。(宮嶋弘氏「源氏物語」(国文学研究
書))

この「御」「おほん」「み」などの問題については、以前に発表した
『枕冊子における敬語』——「をり」の待遇語法と「御」のつく語とを
中心として——(『国文学』第五卷第二号 昭和三五・一月号)にお

いて詳説したが、そこに引いた伊吹和子氏の『隆能源氏絵詞に於ける「御」』(『国語国文』第二二巻第八号 昭和二八・八月号)によると、隆能源氏絵詞・西本願寺本三十六人集・類聚歌合・古今集など、平安朝人の書き残した、いはゆる古筆といはれるものでは、「ご」は、ごくかざられた少数の日本語化した漢語につく——「ご加持」「ご前」——が、それも日本語化した度の高い「賀」などは「御賀」を「おほむが」(忠岑集その他)とよむし、「み」は、「みかど(門)」「みき帳」「み帳」「みくるま」「みこ」「みす(簾)」「み修行」「みづし(厨子)」「みともひと」「みのり(法)」「みはし(階)」などであるが、「みくるま」「みともひと」は、「おほんくるま」「おほんともひと」とも見ている。(大成校異篇によれば、「みともひと」は、諸本「おんともひと」とあるよしである。)そして、「お」は、「おまへ」「おまし」の二語だけであって、撥音無表記のために実際は、「おんまへ」「おんまし」であったかも知れないが、「おー」の表記例は、この二語以外になく、「おんー」とかな書きしたものは、隆能源氏および伊吹氏のみられたかぎりの資料に、その例がなかったさうである。これに対して、「おほん」の例は、多く、つきかたも比較的自由であって、隆能源氏にだけども、「ありさま」「いらへ」「かたさま」「かたち」「くし(髪)」「くどく」「けしき」「ご(碁)」「こち」「こころ」「こころざし」「こころならひ」「こと(事)」「ごうし(曹司)」「さま」「ぞ(衣)」「なか(仲)」「め(目)」「よろこび」の上に「おほん」「おほむ」がついているし、その他の資料において、「あそび」「かへし」「かへり」「賀」「しとね」「すがた」「つかひ」「て」「ふみ」「てづか

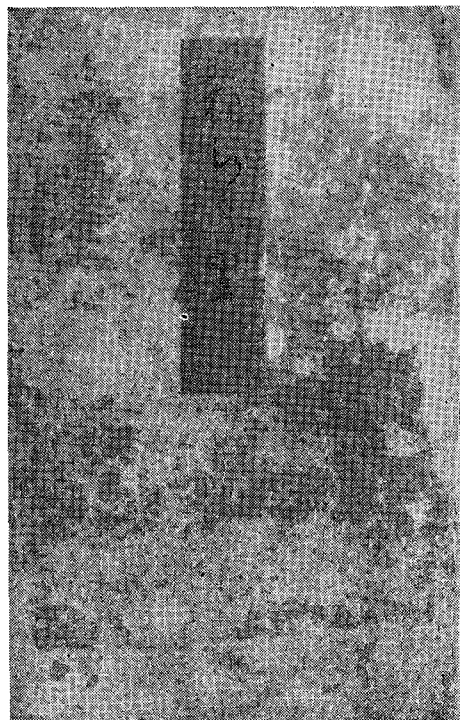
ら」などについた例があるから、伊吹氏は、「御——」の例の大部分は問題なしに「おほむ——」と訓む事が可能であるばかりか、むしろ「おほむ——」と訓むのが穩当ではないかとさへ思はれる。(同誌二〇頁)と述べてをられる。つまり、「御——」の例のほかは、「み——」「お——」「ご——」は限定せられ、「おん——」のかな書きは、その例を見ず、「おほん——」がもっとも多いというのがその結論であった。しかして、枕冊子における場合も、現存資料から考へて、伊吹氏の採られた源氏物語・三十六人集・類聚歌合・古今集などに比して時代が下るが、その結論は、ほぼ同様であった。ただ、「お」のつく単語が「おまへ」「おまし」以外にやはりマ行の語であるが「おもと」「おももの」などが加はってゐる。これらについては、前記小論をぐらんねがたい。

ところで、架蔵本「花ちる里」についてこれをみるに、「御」の字をあてるべきところでかな書きになつてゐる箇所が「みこころづから」の「一オ」「人のみ心」(一ウ)「みこころ」(三ウ)「女御のおほむかた」(四オ)「みけはひ」(四ウ)「おほむさま」(六オ)の六例があり、「み……」が四例、(そのうち、三例までが「心」につづく)。「おほむ……」が二例であつて、「お」「おん」のかな書きは一箇所もない。これは、前掲伊吹氏の結論にあはせてその証をかためるとともに「み——」の例を加えるものであり、室町時代書写の本にしても、これらの表記が見えることは、その資料としてまことにありがたきことといはねばなるまい。右の六例を従来の諸注に「御」として、「おん」とよませたり、あるいはよみかたを示してないものに対して、国語学

的にも貴重な参考資料になるであらう。源氏物語大成 校異篇「花ちるさとの校合本によると、青表紙本系統本で、横山本といはれる本に「おほん心」(三八七頁)「おほん車」(三八八頁)「おほん心」(同)「おほんおほえ」(三八九頁)「おほんさま」(三九〇頁)「おほんさま」(同)などの表記が目立つが、他には「御」のよみかたに参考すべき本があまりないやうである。この横山本は、源氏物語大成 研究資料篇 第三部 現存重要諸本の解説によると、四十九帖あり、帚木・朝顔・藤袴・幻・手習の五帖を缺く。縦五寸五分五厘横五寸一分の胡蝶装。紺表紙で、本文系統は、橋姫・椎本・総角三帖が別本、他はすべて青表紙本と認められる、鎌倉時代中期ころの写しで、一面九行に書き、まれに十行の巻もあるとのことであるが、ここに紹介した書とはまったく関係がなささうである。

なににしても、「みー」「おほむー」の本文表記をこの本の書写者が勝手にかな書きにしたとは思へず、より古い本からの写しとすれば、その資料価値は源氏物語本文研究上だけでなく、「御」のつく語の研究に資することも大である。

以上「花ちる里」の一本を紹介した。実は、この本文を通じて源氏物語プロパーの本文にまで説きおぼしたかったのであるが、その力と暇とがなく、ただこれを紹介するにとどまった。さいはひ、この巻の全文を翻刻することができたから、それによって研究の資料としていただければ、幸甚である。



花ちる里

(翻刻)

- 一 本文の行数・字詰は、原文のままである。
- 二 本文に加へられた朱点・朱注の類は、すべて脚注にした。

全れぬんては流るる物たりんては流るる事なれどかたの世はせ
てさへわつらはしうおほしみたるゝ事のみまさ
れば物心ほそくよの中なへていとほしう思めく
らし給にさすかなる事おほかりれいけてん
ときこえしは宮たちもおほせす院かくれ
させ給てのちいよくあはれなる御ありさまをたゝ

この大將殿の御心はへにもてかくされてすくし給
なるへし御おとうとの三の君もうちわたりに
てはかなくほのめき給しなこりれいの御心な
れはさすがにわすれもはて給はぬに人のみ
心のみつきはて給へるめるをもこのころのこる
事なくおほしみたるゝ世のあはれのくさはひ
には思いて給にもしのひかたくて五月雨の空めつら

一オ

人しれぬみこゝろつからの物おもはしきはいつれ

となき事なめれとかくおほかたの世につけ

てさへわつらはしうおほしみたるゝ事のみまさ

れば物心ほそくよの中なへていとほしう思めく

らし給にさすかなる事おほかりれいけてん

ときこえしは宮たちもおほせす院かくれ

させ給てのちいよくあはれなる御ありさまをたゝ

一ウ

この大將殿の御心はへにもてかくされてすくし給

なるへし御おとうとの三の君もうちわたりに

てはかなくほのめき給しなこりれいの御心な

れはさすがにわすれもはて給はぬに人のみ

心のみつきはて給へるめるをもこのころのこる

事なくおほしみたるゝ世のあはれのくさはひ

には思いて給にもしのひかたくて五月雨の空めつら

「なめれ」と「と」
ニ濁点ヲウチ、ソノ下
ニ朱点ヲウツ

「おほかり」ノ下ニ朱
点アリ

「おほせす」ノ下ニ朱
点アリ

「御ありさまを」
ノ下ニ朱点アリ

「なるへし」「三の君
も」ノ下ニソレソレ朱
点アリ、「三の君」ノ右
肩ニ「花チル里」ト
朱注アリ
「なこり」ノ下ニ朱点
アリ
「給はぬに」ノ下ニ朱
点アリ

「しのひかたたく
て」ノ下ニ朱点
アリ

しく晴たる雲まにわたり給なにはかりの御
 よそひならずうちやつして御せんなどもことにな
 くしのひ給へり中川のほとおはしすくるに
 さゝやかなる家の木たちなとよしはめるによ
 くなるさうのことのあつまをしらへてかきあは
 せにきはしくひきなすなり御みゝとまりて
 かとちかなる所なればすこし。いてゝ見いれ給へは
 二ウ

おほきなるかつらの木のをひかせにまつりの
 ころおほしいてられてそこはかとなくけはひ
 おかしきをたゝひとめ見給しやとりなりと思
 いて給にたゝならすほとへにけるをおほめかし
 くやとつゝましけれとすきかてにやすらひ
 給ふおりしもほとゝきすなきてわたるもよ
 ほしきこえかほなれば御くるまおしかへさせ給て
 「なれば」ノ下
 二朱点アリ

二オ

「わたり給」ノ下ニ朱点アリ

「よそひ」ノ右肩ニ「シヤウソク也」ト朱注アリ

「給へり」ノ下ニ朱点アリ

「さゝやかなる」ノ右肩に「輕」ト朱注アリ
 「さゝやかなる」ノ「さ」ニ朱ニテ濁点ヲ附セリ

「かとちかなる」ノ「とち」ニ朱ニテ濁点ヲ附セリ
 「給へは」ノ下ニ朱点アリ

二ウ

花ちる里をたれまふ

せりがかりきさう志のよれぬ林まは

かたらしやとの垣ねにしんとおほしき屋の

わりのまに人くゝゐたりさきくもきくしこゑ

なればこはつくりけしきとりて御せうそきこ

ゆわかやかなるけしきともしておほめくなるへし

ほとくすすかたらふこゑはそれなれとあな

三ウ

おほつかな五月雨の空ことさらにたとるとみ

れはよしうへし垣ねもとて出るを人しれぬ

心にはねたくもあはれにもおもひけりさうつゝ

むへき事そかしことほりにもあればさすかなり

かやうのきはにはつくしのこせちこそらうた

けなりしはやとまつおほしいつかなるにつけ

てもみこゝろのいとまなくくるしけなり年月

「をちかへり」ノ右肩
ニ「源」ト朱注セリ

「垣ねに」ノ下ニ朱
点アリ、「しんとん」
ノ「て」ニ朱ニテ濁
点ヲウツ

「ゐたり」ノ下ニ朱
点ヲウテリ

「ゆ」ノ下ニ朱
点ヲウツ

「ほとくす」ノ右肩
ニ「誰共ナシ」ト朱注
ヲ加ヘタリ

「れは」ノ下ニ朱点ヲ
ウツ「うへし」ノ右肩
ニ朱ニテ「」トアリ

「こせち」ノ右肩ニ朱
ニテ「」トアリ、「こ」
ニ朱ノ濁点ヲ附シタリ

「くるしけなり」ノ下
ニ朱ニテ点ヲウテタリ

おほつかな五月雨の空ことさらにたとるとみ
れはよしうへし垣ねもとて出るを人しれぬ
心にはねたくもあはれにもおもひけりさうつゝ
むへき事そかしことほりにもあればさすかなり
かやうのきはにはつくしのこせちこそらうた
けなりしはやとまつおほしいつかなるにつけ
てもみこゝろのいとまなくくるしけなり年月

とぞよみかきやまらやあはれはるけいそく
 志行なむしりうきくあまたの人の物思
 くらさなりけきとてけいひの所はかりなり
 けりともくく人さるるさつふてなすりあり
 海かゆすてあはれなりもつ女御のお
 ちしとて昔の御物かたりなときこえ給に
 夜ふけにけり廿日の月さしいつるほとにいと

木たかきかけともこくらくみえわたりてちか
 きたち花のかほりなつかしくにはひて女御
 のみけはひのねひたまひにたれとあくまで
 よういありてあてにらうたけなりすくれ
 て花やかなる御おほえあさりしかとむつま
 しくなつかしきかたにはおほしたりしものをなと
 おもひいてきこえたまふにしもむかしの事

四才

をへてもなをかやうに見しあたりのなさはすく

し給はぬにしもそ中くあまたの人の物思ひ

くさなりけるさてかのほいの所はおほしやり

つるもしるく人めなくしつかにておはするあり

さま見給ふもいとあはれなりまつ女御のお

ほむかたにて昔の御物かたりなときこえ給に

夜ふけにけり廿日の月さしいつるほとにいと

四ウ

木たかきかけともこくらくみえわたりてちか

きたち花のかほりなつかしくにはひて女御

のみけはひのねひたまひにたれとあくまで

よういありてあてにらうたけなりすくれ

て花やかなる御おほえあさりしかとむつま

しくなつかしきかたにはおほしたりしものをなと

おもひいてきこえたまふにしもむかしの事

「ける」ノ下ニ朱点ヲ
ウツ

「女御」ノ右肩ニ「ハレ
イケイテン」ト朱注アリ

「たれと」ノ「と」ニ
朱ノ濁点アリ

「らうたけなり」ノ下
ニ朱点アリ

「御おほえ」ノ右ニ「
故院ノ」ト朱注アリ

かきつらねおほされてうちなき給ほとまき
 ありつる垣ねのにおおなしこゑにうちなく
 したひきにけるよとおほさるゝほともえん也
 かしいかにしりてかなとしのひやかにうちすんし給
 たちはなの香をなつかしみ郭公花
 ちるさとを尋てそとふいにしへのわすれかた
 うおほえ給へらるゝなくきめにはまつまいり

五ウ

侍ぬへかんめりこよなくこそまきるゝ事う
 ちそふかたおほう侍りけれおほかたの世にした
 かふ物なりければはかなきむかしかたりもまか
 すへき人すくなくなりゆくをましていかに
 つれゝもまきるゝ事なくおほさるらんときこえ
 給にみないとさらなる世なれと物をいとあはれ
 とおほしつゝけたる御けしきのあさからぬをな

「うちなき給」ノ下ニ朱点アリ

「いかにしりてかなと」ノ右ニ「イニ」シエノ事カタラエハ時鳥イ

「うにすんし給」ト朱注アリ

「うにすんし」ノカニシリテカフルコエニナク

「うにすんし」ノト朱注アリ

「うにすんし」ノト朱注アリ

「めり」ノ下ニ朱点アリ

「侍りけれ」ノ下ニ朱点アリ

「給に」ノ下ニ朱点アリ
 「世なれと」ノ「と」ニ朱ニテ濁点ヲ施ス
 「あさからぬを」ノ下ニ朱点アリ

人の御さまからにやおほくのあはれそゝひける
 人めなくあれたる宿は橘の花こそ軒
 のつまとなりけれとはかりの給ふもさはいへと
 人にはいとことなりけりとおほしくらへるにし
 おもてにはわさとなくしのひやかにうちふるま
 ひてのそきたまへるもめつらしきにそへて世に
 めなれぬおほむさまなれはつらさもわすれぬ

へしなにかやとれいのなつかしくかたらひ
 たまふもおほさぬ事にはあらさるへしかり
 にも見給かきりはおしなへたるきはにしあら
 ねはやさま〜につけてゆうにわれも人もな
 さけをはかはしつゝすくしたまふなりけり
 それをあひなしとおもふ人はとにかくにと
 うちかはるを又ことほりの世のさかとおも

六才

人を御さまからにやおほくのあはれそゝひける

人めなくあれたる宿は橘の花こそ軒

のつまとなりけれとはかりの給ふもさはいへと

人にはいとことなりけりとおほしくらへるにし

おもてにはわさとなくしのひやかにうちふるま

ひてのそきたまへるもめつらしきにそへて世に

めなれぬおほむさまなれはつらさもわすれぬ

六ウ

へしなにかやとれいのなつかしくかたらひ

たまふもおほさぬ事にはあらさるへしかり

にも見給かきりはおしなへたるきはにしあら

ねはやさま〜につけてゆうにわれも人もな

さけをはかはしつゝすくしたまふなりけり

それをあひなしとおもふ人はとにかくにと

うちかはるを又ことほりの世のさかとおも

「人めなく」右肩ニ
「女御」ト朱注アリ

「給ふも」ノ「も」ノ
下ニ朱点アリ

「おほしくらへる」ノ
下ニ朱点アリ「にし」
ノ右肩ニ「花チル」
ト朱注アリ

「あらさるへし」ノ下ニ
朱点アリ

「はや」ノ下ニ朱点アリ

「なりけり」ノ下ニ朱
点アリ

「うちかはるを」ノ下
ニ朱点アリ「世のさ
か」ノ「か」ニ朱ニテ
濁点ヲ施ス

ひなしたまふありつる垣ねもさやうにて
ありさまかはりにたるあたりなりけり

七オ

ひなしたまふありつる垣ねもさやうにて
ありさまかはりにたるあたりなりけり

「たまふ」ノ下ニ朱点アリ

(本学教授「国文学」)